

郷土を知り、郷土を愛する

## 志木市 歴史まんぼ

—— 執筆・協力 志木のまち案内人の会 ——

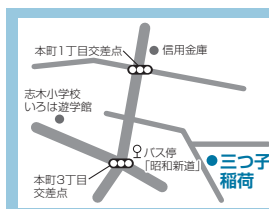
## 第71回 子狐の死と三つ子稲荷の話

本町のバス通り。昭和新道と上町バス停のほぼ中ほどの角長商店から大原方面に江戸道と呼ばれる通りがあり、バス通りから80メートルほど入った左側に小さなお稲荷さん「三つ子稲荷」があります。幕末に角長森田家の始祖である長太郎さんが体験したのがこの三つ子稲荷の話です。

お客さんに良い品を仕入れるため14kmも離れた板橋宿まで足を運ぶのが通例で、板橋宿であちこちの間屋を巡り歩いて仕入れを済ました頃には陽も陰りかけていました。長太郎さんは、いっぱい積んだ荷車を引いて帰路を急ぐため、白子川を渡り、街道一の難所、白子坂へと差し掛かりました。坂を上って、もうじき峠という所までたどり着いたとき、何か黒いものがうずくまり、それが動いているようにも見えました。そばに寄ってみると、大きな狐のようで息遣いも荒く、体を丸め、

厳しい苦痛に耐えているのか立ち上がって逃げる気力も失せているようでした。よほど重病らしいと見た長太郎さんは何とかしてやれないかと思い、我が家に連れて行こうと決心し、狐を両腕で抱え上げ荷車の中に乗せて帰宅しました。話を聞いてびっくりした奥さんは、かわいそうに思っただけで納屋の隅に木箱を置き、中にいっぱい稲藁を敷き、長太郎さんは荷車から狐を抱えてきて寝かせました。奥さんは店売りの油揚げと水を入れたどんぶりを頭のそばに置きました。翌朝、目を覚ました奥さんは夕べの狐が気になり、納屋の箱を覗いてみると、赤ちゃん狐が三匹も生まれているのに気がしました。しかし、母狐のお産はよほど重かったのか、箱の中にふせたままで元気がなく、油揚げも食べ残したままでした。乳の出もよくなかったのか、せっかく誕生した子狐も4・5日の間に次々と死んでしまい、母狐も子狐たちの後を追うかのように死んでしまいました。長太郎さんの夫婦はせめてもの供養にと、親子4匹の狐を江戸道沿いの自分の家の畑の隅に親子いっしょに葬る塚を造って厚く弔いました。やがて狐たちの塚にお稲荷さんの祠を建てて祀ったら狐親子の霊も鎮まるだろうと思い、祠を造り赤い鳥居を建て神主さんから伏見稲荷大明神の神霊を迎えてもらい「正一位三つ子稲荷大明神」と名付けました。

そして三つ子稲荷として祀った狐に長太郎さん夫婦は支えられ、商売に精を出すことができました。



所在地／  
本町3-3-28付近  
バス停「昭和新道」から徒歩3分ほど



## 人と人との「つながり」を大切にしながら…

宿組八坂神社祭礼、宗岡三社祭から盛大にスタートした「志木の夏祭り」も、9月26日予定の志木ニュータウン森の祭りの開催を残すのみとなりました。私も各地域で夏祭りに参加させていただき、皆さんの熱気に包まれながら神輿と一緒に担がせていただいています。神輿を担ぐ方、太鼓を叩く方、屋台を出す方、警備をしてくださる方など、地域一体となり志木市を盛り上げようとする市民力に、改めて、心強さを肌で感じています。

毎年開催される「志木の夏祭り」をはじめ、地域の伝統行事には、先代たちにより長年受け継がれてきた人と人との確かな「つながり」があります。この「つながり」こそが、我々が次代へ大切に引き継いでいかなければならない「宝物」だと思っています。

志木市は「ベッドタウン」と呼ばれることがあります。ベッドタウンとは、都心で働く人々が夜になると眠るために帰ってくる場所という意味です。実際に、埼玉県

昼夜間人口比率(市の人口に対する日中に市内にいる人の割合)は全国で最も低くなっています。中でも志木市は県内で2番目に低く、昼間の人口が夜間の人口を下回るベッドタウンの特性が非常に強い地域ということが見て取れ、「隣に住んでいる人がどんな人かわからない」「近所付き合いがほとんどない」といった地域コミュニティの希薄化も課題となっています。

また、近年、全国的に地域のお祭りなどの伝統行事が、担い手の高齢化や人口減少などにより、存続していくことが困難な地域も増えている状況ですが、地域の笑顔と元気につながる志木市の大切な伝統行事は、しっかりと守り抜いていかななくてはなりません。都心に近いという魅力もある一方で、人と人との関わりが薄れつつある今だからこそ、夏祭りや盆踊りなどの行事を通じて、普段なかなか顔を合わせることができない人と人が、地域の「つながり」を深め支え合う関係を築くことがとても大切だと思っています。

志木の夏は、まだまだこれから。8月には、各町内会主催の盆踊り大会や納涼大会が開催されます。志木市の伝統行事を皆さんとともに守り育てていくことが市民の皆さんの誇りとなり、「志木市に住み続けたい」という気持ちにもつながります。普段、地域の行事になかなか参加できない人も、今年の夏は、ぜひ、地域との「つながり」を意識しながら志木市の伝統行事に触れていただけたら嬉しく思います。